

NPO と行政の協働会議

2006 年度 第 2 回 全体会議事録

開催日時： 2006 年 7 月 20 日 (木) 15:00 ~ 17:00

開催場所： ひょうごボランティアプラザ セミナー室

出席者 (幹事等名簿):

(敬称略、順不同)

テーマ	区分	所属団体等	氏名
NPO への委託・補助事業における評価のあり方	行政部会幹事	兵庫県県民政策部参画協働課長	藤原 純一
		兵庫県県土整備部復興推進課長	鬼本 英太郎
	NPO 部会幹事	(特)ブレーンヒューマニティー	能島 裕介
		(特)Green Alliance	杉野 慶一
		(特)さんぴいす	河口 紅
		(特)HINT	竹村 太佑
		神戸フリースクール	田辺 克之
		(特)生涯学習サポート兵庫	山崎 清治
関係NPO	(特)コミュニティ・サポートセンター神戸	坂本 登	
県関係課室	兵庫県企画管理部新行政課主幹	瀬川 里志	
コミュニケーション能力の向上(学校・クラブ・授業の中で)	行政部会幹事	兵庫県県民政策部ビジョン課長	畑 正夫
	NPO 部会幹事	(特)コムサロン21	前川 裕司
		(特)阪神高齢者・障害者支援ネットワーク	黒田 裕子
		(特)シンフォニー	山崎 勲
		(特)福祉住環境サポートセンター	貫名 康雄
		(特)マザーズサポーター協会	真田 由美子
関係NPO	(特)マザーズサポーター協会	木村 孝子	
県関係課室	兵庫県教育委員会事務局義務教育課指導主事	中田 直人	
事務局		ひょうごボランティアプラザ所長	小森 星児
		副所長	高橋 守雄
		事務局長	市田 秀夫
		次長兼交流支援部長	稲垣 郁子
		交流支援部副部長	岩根 登
	(特)ブレーンヒューマニティー	辰巳真理子	

協 議 内 容

2テーマについて2グループに分かれ、それぞれにNPO部会幹事、行政部会幹事、関係NPO、県関係課室で討議を行った(進行はNPO部会担当幹事、行政幹事)。討議後、各グループでの討議結果発表。

(テーマ)

NPOへの委託・補助事業における評価のあり方について
コミュニケーション能力の向上(学校・クラブ・授業の中で)について

司会・進行： N P O 部会 黒田幹事

1. 議事概要

(1) あいさつ

- ・ プラザ (高橋副所長)
- ・ N P O 部会幹事 (前川幹事)

(2) オリエンテーション

(3) 分野別協議

(4) 全体発表

N P O への委託・補助事業における評価のあり方 (河口幹事)

現時点では、これができたできないとか、何人来たとかの定量的な評価が多い。行政から受けた事業をN P O がするという根源的な意味でも、できたできなかったよりできたことによって何が生み出されたかというところまでの評価や満足度等を計る定性評価が必要。評価をきちっと作って行かなければ、今後県民への説明責任を果たしていけないのではないかとして様々な意見がでた。評価をどういう視点で、誰が誰に対して評価するのかをもっと話し合わないといけないということで、まとめとして研究会を設置していくべきとの話になった。研究会については、提案者のC S 神戸がN P O の代表となり、行政側は参画協働課を窓口として具体化を図る方向となった。研究会の出力は協働会議でも情報共有し、評価をどう活用していくのかも協働会議のテーマになっていくのではないかと考えており、今後も継続的に進めていくことになった。

コミュニケーション能力の向上 (学校・クラブ・授業の中で) (前川幹事)

会話不足による事件もあり、親子あるいは学校の先生と生徒の関係での重要性は認識できる。学校教育へのプログラムの導入ということだが、学校ですでに取り組みがあり、総合学習の中でコミュニケーションを高めるために全学年で一緒に掃除をしたり、課外活動等でいろいろ取り組まれている。その中でプログラムを一方向的に提案しても採用されないだろうし、カリキュラムレベルでは、「いいことだから」だけでは実現しない。

ただ現場としては問題があるのは確かなので、どうすればいいかという話の中で、漠然とコミュニケーションと言っても、それにはジャンルもあるし、課題も多くあるのでもう少し絞って行く必要がある。特に今回は小学生の生徒同士あるいは教師との交流をテーマにしたときには、ワークショップや課外研修のようなものを含めたプログラムをもう少しきちっと作って、それを発表していくことが必要である。

今回の一つの答えとしては、小学校は各市町の教育委員会もっと具体には学校長に持っていかなければ無理なので、先生自身がそういうことを感じていることもあると思うので、先生の勉強会の輪に提案するのがいいのではということになった。具体的には、ひょうごボランティアプラザでしている福祉学習の集いとかの先生が集まる場所を紹介してもらって先生の集まりに持って行くことから始めればどうかとの話になった。

先生の集まりの中に入れていって、そこで何か生みだしたら、継続的に協働会議の中に入れていく。

(5) 総括 (小森所長)

N P O への委託・補助事業における評価のあり方について

行政が N P O と一緒に仕事をする場合、N P O 向けのルールを決めてするのか、企業や外郭団体などの他の団体と同じルールであるのか、兵庫県では決めていない。他県では協働のルールを決めているところがあり、一応は別ということになっているが建前であり、現実にはそこまで進んでいるところはない。いわんや市町となるとなおさらである。

もし行政に対して N P O に特別の取り扱いを要求するなら、それなりの根拠が必要であるし、そうでないなら、N P O 側が自分たちでルールを決めるのが当然ではないかと思う。

では何から手を付けていけばよいか、何が問題かと言えば、自己点検、自己評価、さらに第三者評価というやり方しかないのではないかと思う。大学でも 10 数年苦しめられているが、その際それぞれの大学が勝手にやっても困るから、スタイルを統一してやろうということになっている。

一番手近に欲しいと思うのは事業報告書だが、プラザの助成事業の報告書では、こういうことをして何人集まったとしか書いていない。県に出すものは、人数すら書いていないものがある。いくつかの団体は、こういう趣旨で、こういうことでやって、こういうところに呼びかけて、こういう人が集まったということまで仔細に書いているところもある。こうすると膨大になり、兵庫県は分からないが、他の県では A 4 一枚にまとめてくれと指導しているところがあると聞いたことがある。

このあたりを標準化して、まずここに集まっている団体だけでも、事業報告書の書き方をどうしたらよいか、何を書き込むかということから議論すればどうか。先の方をめぐってのルールづくりもいいが、それぞれの団体が改善できる点はまだあるのではないか。国立大学では、自己点検、自己評価、第三者評価で研究費の配分にウエイトがかけられている現状がある。

ピア評価、ピアレビューで同輩が見れば分かるものなので、N P O はまず自分たちの仲間の N P O の分かりやすい評価をできるのではないかと思う。

コミュニケーション能力の向上 (学校・クラブ・授業の中で) について

昔イギリスに留学していた時に一番驚いたのは、イギリスでは大事なことほど 1 度しか言わない。日本では大事なことを言っても半分くらいの人には聞いていない。もう一度説明するが、それでもまた個人的に来て同じことを聞く。コミュニケーションで大事なことを何度も繰り返すやり方でしているのが問題ではないかと思う。大事なことは一度しか言わないというコミュニケーションのやり方もあると思う。

子どもの発達段階から言って、バーバルつまり言語的なコミュニケーション能力となると、個人差、家庭での教育の差があって小学校レベルでは難しいかなという気がする。

最後の方にプラザがという話があったが、福祉学習は県社協の仕事だが、それ以外となると会場を提供することはできても、それ以上呼びかけて云々はなかなか難しい気がする。

もう少し皆さん方に魅力のある研修の機会が作れるのではないかと思うので、是非ご検討いただければと思う。

(6) あいさつ (行政部会藤原幹事)

(閉 会)